

デフォー研究の意義と方法について

坂井晴彦

一 二つの立場

ダニエル・デフォーの小説を、イギリス近代小説の一起点として重視する見解は、近年主として、アーノルド・ケトル、アン・ウォット、A・D・マッキロップ等の研究を通じて定説化したと思われるが、これらの諸研究は、単にデフォーの小説のみならず、政治、宗教、経済その他、人間活動の広範な領域を論題とするおびただしいその著作と、デフォーその人の、商人、非国教徒、政府の密偵、ジャーナリスト等としての活動をも考察の対象とすると共に、十七、八世紀全般の思想的社会的背景、特に、近代市民社会の勃興と、現実主義合理主義精神の発展との密接な関連に於て、デフォーを把握せんとするものである。この立場は、「歴史的」「社会学的」視点を強調するものと云えよう。

これに対し、デフォーの小説を、文学そのものの内在的価値にてらし、独立した文学作品として評価せんとする立場にあつ

ては、見解が大きく別れているようである。先ず、否定的見解の代表者としては、その影響力の大きさから見て、F・R・リーヴィスがあげられよう。彼は、『大いなる伝統』の中で、というより、わずかに脚註の形で、前代のデフォー「裁断者レズリー・ステイヴンを全面的に支持し、デフォーの影響は、たかだか、十九世紀の「荒唐無稽なコント」または「似非道德物語」作者に及んでいないと酷評して、厳格主義者ふりを発揮している。

一方、デフォーの小説を肯定的に評価する者としては、E・M・フォースター、V・ウルフ、V・S・ブリチエット等があり、彼等はいずれも、純文学的立場から、デフォーの描き出す人間像、その表現法に、現代的意義を見出している。

われわれが、日本人研究者として、デフォーにアプローチする場合、第一の、歴史的、社会学的立場よりする研究については、西洋近代文化のわれわれに及ぼす影響の広さ、深さを思えば、その重要性は云うまでもなく、また、それが、デフォー研究の必然的一面となることも、後述する如く、是認されるであろう。

問題は、第二の立場、つまり、デフォーの小説を、単なる文化史研究の一資料、小説史中の「一コマ」としてではなく、独立した文学作品としても研究しうるか否かである。鑑賞と不即不離の関係にある文学研究が、知識の吸収と紹介にとどまり、現代に生きる研究者に何等の興味と関心をいだかせぬならば、小説を小説たらしむる本質的必要条件——読者に文学的興味と

感動を喚起させる要素——を全然ともなわぬ小説を研究することはナンセンスであろう。デフォーの小説が、文学作品としても、われわれ日本人研究者に訴える要素を含むか否かが先ず検討されねばならない。

ただ、その場合、如何なる価値判断の基準に従って、デフォーの小説を評価すべきか、如何なる内容の興味と問題が提起されるか、又、如何なる方法によれば、その興味と問題を文学的研究の対象としうるかも、同時に明らかにされねばならぬであろう。特に、デフォーとは約二世紀の時間をへだて、異質の空間的文化的環境の中に生き、明治以来の日本近代文学を吸収して、意識的無意識的に小説鑑賞の姿勢と評価基準を身につけてきたわれわれにとっては、はじめてデフォーの小説に接する時、英米研究者とは異なる違和感と抵抗の生ずる事も、評価に際して無視しえぬ事実である。

本稿に於ては、第二の立場を重視しつつ、これらの問題を考察し、第一の立場との関係を、ごく概括的に調べてみたい。

(デフォーの小説の詳しい内容と、それに関する具体的な私見は、近く別の機会に発表することになっているので、本稿は、研究の成果としてではなく、バースベクティヴを示すものとして書かれた事を、あらかじめおことわりしておく。)

(1) Arnold Kettle: *An Introduction to the English Novel* (London, Vol. I, 1951).

Ian Watt: *The Rise of the Novel* (London, 1957).

A. D. McKillop: *The Early Masters of English Fiction*

(London, 1962).

(2) わが国における此の立場からの研究としては、内多毅「Daniel Defoe の小説史的意義」(『イギリス小説の社会的成立』研究社。一九六〇年)がある。

(3) この点についてはイマン・ウォレットの前掲書第四章「Defoe as Novelist: Moll Flanders」に詳し。

(4) F. R. Leavis: *The Great Tradition* (London, 1948), p. 2, n. 2.

(5) E. M. Forster: *Aspects of the Novel* (London, 1927); Virginia Woolf: 'Defoe' (in 'The Common Reader' Vol. I, London, 1925); 'Robinson Crusoe' (*ibid.*, Vol. II, 1932).

(6) わが国に於ける、第一、第二の立場を共に重視した近年の研究としては、

海老池俊治「ロビンソン・クルーソー」(『第十八世紀英国小説研究』研究社一九五〇年)がある。

(7) 『青山学院女子短期大学紀要』第十八輯(一九六四年一月)掲載予定。

二 夏目漱石のデフォー評価

わが国において、デフォーの小説を初めて本格的に論じたものは、夏目漱石の『文學評論』であると思われる。今さら漱石とは、の感がなくもないが、一九〇九年出版という年代の古きにもかかわらず、実作者としても、英文学者としても「借り物」

でない学識と見識を備え、主体性を保持してデフォーに迫った漱石の態度と、論旨展開の巧みさ、鋭さには——現在の時点から見て、その評価の基準と結論には疑問が残るにせよ——今尚学ぶべき点が多々ある事は否定できない。更に、デフォー評価の立脚点となった漱石の小説観は、十九世紀的、東洋的美観の影響が大きいにもかかわらず、現在もなおわが国知識階級の意識に深く根を下している小説観の一つのタイプと見られ、ひいては、従来のデフォー観の一類型とも考えられるので、先ず、漱石の説を一瞥する。

『文學評論』第六編「ダニエル・デフォーと小説の組立」に於て、漱石は、十八世紀イギリス小説、特にデフォーについて、次の様に述べている。

「……たゞに政治宗教のみではない、文學上の述作にも崇高の感を起すものは殆んどない。……フェールザング、スモレット、リチャードソン、スターン其他の諸家に至つて悉く同じである。其うちでも最も崇高莊嚴の反對極にあるものがデフォーである。デフォーの小説は氣韻小説でもなければ、空想小説でもない。撥情小説でもなければ滑稽小説でもない。たゞ労働小説である。どの頁を開けても汗の臭がする。しかも紋切り形に道徳的である。デフォーの小説はある意味に於て無理想現實主義の十八世紀を最下等の側面より代表するものである。」(三四九頁。傍点筆者、以下の引用に於ても同じ。)

続いて漱石は、デフォーの主な小説の構造、特に人物の性格、プロット、文体、写実の方法等について、実例をあげ、時には、

類似場面の描写法を、ステイヴンソン、あるいはテニソンの表現と比較しつつ、詳細に分析している。

『草枕』『虞美人草』の作者から見た『ロビンソン・クルーソー』『モール・フランダーズ』等に対する批評は、作風の相違が著しいだけに、一層鮮かに読者の印象に残る。その一、二を、デフォーの小説評価の参考としてあげると、その詩的情緒の欠除、文章の冗長さ、盛りあがりの乏しさに関しては、

「……極端に云へば同じ膳に向つて同じ箸で三度の飯を繰り返してゐると同様である。但し何遍繰り返しても人生の事實だから、事實通り度數迄も嘘でない様にかくんだと云へば夫迄である。然し此智識を得て喜ぶもの警察の役人ばかりだらう。」(三七九頁)

と述べ、デフォーの写実は眞の写実ではないと批判したうえで、最後には、

「萬事實用から割出して、損得を標準にしてゐる様に見える。……塵一本でも書き落しては勿體ないと云ふ下司張つた根性から出る。……つまらぬ事を寄せ集める癖があるから、綿密で、周到で、探偵的であるけれども、如何にも下卑てゐる。……尤も彼の書いた書き振を除いて取材の方面を論ずると極めて浪漫的なものが多し。浪漫的と云つたつて固より下等な意味である。鰐を殺したり、海賊になつたり、野蠻人と喧嘩をしたり頗る亂暴なものである。さうして、其殺したり、なつたり、したりする人間が少しも浪漫的でない、普通の人間でもない、全くデフォーの様な實用的器械であることも慥かな事實である。」

(三九一頁)
と、手きびしく論断している。

デフォーの小説に、文学としての現代的意義を探らんとする本稿に、「明治時代の」漱石の、それも否定的見解を提示したのは、次の諸点を指摘したいからである。

(一) 「私は正直に白状するがデフォーの全集を読み通してゐない。」と漱石はことわっているにもかかわらず、結論の当否は別としても、デフォーの小説全般にわたって、『文學評論』の著者ほど、精彩に富んだ筆を駆使して詳論し批判した研究者は、現在に到るまでわが国にはいない。

(二) 漱石が、日本人としての自覚を持って英文学に対決した事は、既にしばしば指摘されているが、デフォーに対しても、同じ主体的態度が一貫していると共に、日本人読者の多くが、現在、デフォーの小説に接する時、先ず受けると思われる印象が、かなり正確に代弁されている。この意味で、われわれがデフォー研究に志す場合に、『文學評論』は、一度は通過してよい道であろう。

(三) この点が最も重要であると思われるが、漱石が、時には好悪感をむき出しにして指摘したデフォーの小説の特徴は、大体に於て正確である。この点について、われわれの興味を惹くことは、V・S・プリチェットが、「デフォー論」の中で、その小説の特徴を指摘するのに用いた評語と、漱石のそれとは、用語の古めかしさを別にすれば、かなり一致している事である。その全部を列挙する余地はないが、プリチェットは、デフォー

の小説中の人物について、「彼らは労働者であり、立案者であつて、けちな犯罪とか家事の切り盛りとかいう辛い仕事があるだけだ。感情を洗練する暇などないし、そのほうの能力は退化している。……生きるためには、知謀に富んでいること、金と世論について考えること、が必要である。私欲と心配とのいりまじった心で、神について何気なく考えることさえ不可欠なのだ。」と述べ、叙述の方法に関しては、「一切のものはことごとまかに説明され、物的証拠へと引下げられるのである。」と記している。漱石の云う、「無理想現実主義」「崇高莊嚴の反対極」「紋切り型に道徳的」「労働小説」「非浪漫的」等々の性格が、デフォーの小説に著しい事は疑いない。(現在のわれわれの周囲にも、と云えないであろうか。)

ただ、重要な相違は、漱石が、これらの性格のゆえに、その小説美学にてらして、否定的評価を下したのに対して、プリチェットは、むしろこれらの性格のゆえに、デフォーの小説は、人間の不変の本質にせまったもの、日常性のよどみに生きる庶民の生活を、克明に、詩的情緒を抜きにして描き出したものとして高く評価し、その現代的意義を見出している点に存する。

ここまで漱石の歩みを辿ってきたわれわれの前には、進むべき道が二つに分れている。一つは、デフォーの小説の「文学的価値」を否定して、これと訣別し、漱石、あるいはリーヴィスの延長線上に研究対象を求める道、つまり、狭義の美学的道徳的基準に適う小説研究に従う道である。この道が、文学を愛す

る者にとって魅力にあふれるものである事は云うまでもない。

他の道は、複雑多様な社会と、その中に生きる人間の、醜悪卑俗な面をも包含する生活と思想を、ありのままに描き出す小説に、文学作品としての意義を認めて、これを研究する道である。デフォーの小説を文学作品としても肯定的に評価し、現代的意義を見出さんとする者には、この道を進むことが必然的な課題となろう。漱石の時代に比して、現在の社会的精神的風土に生きるわれわれにとっては、この道を取ることは、むしろ容易であり、またその必要性も大であると思われる。そのみか、漱石と異なる小説観にてらして、デフォーの小説に対すれば、別の意味での強い興味と関心を喚起させられるであろう。デフォーとわれわれとの間に存する距離は、物理的時間の進行とはむしろ反比例して、縮少しつつあると云えよう。

最後にわれわれは、この道にそってデフォーの小説にアプローチする場合に取るべき、具体的方法について考えてみたい。

(8) 夏目漱石『文學評論』(『漱石全集』第一九卷、岩波書店、一九五七年版)、本文中の引用はこの版による。

(9) この比較にも、漱石の小説観の一つの特徴がうかがわれる。

(10) デフォーのみならず、イギリス十八世紀全般の情勢をはじめ、アジソン、スウィフト、ボープ等について詳細に論じた本書は、レズリー・ステイヴン其他、底本として用いられた著書の影響はあるにせよ、あるいは、資料的誤謬は見出されるにせよ、これに先立つ『文學論』と共に、

今尚、多くの示唆に富み、外国文学研究者に反省の資を与えるものであると思われる。

(11) デフォーの小説中、翻訳されているのは、『ロビンソン・クルーソー』以外には、『ベスト』(『A Journal of the Plague Year』)のみである。この事実も、従来のがくに於けるデフォー評価の一例証と見られる。

(12) 前註の二小説が訳載されている、筑摩書房版『世界文学大系』第一五巻の巻末に、本論文も収録されている。本文中の引用は、丸谷才一氏の同訳文を借用。

三 文学的立場と歴史的立場の総合

たとえば、『ロビンソン・クルーソー』を読み初めるとすぐ、次の様な文章に出会う。「……だが私は、なんとしてでも船乗りにならないでは満足できなかった。この性質のおかげで、ついには父の意向、いや、命令と正面衝突し、母や友だちの懇願も説得も水の泡ということになった。持って生れたこの性分には、いずれば悲惨な生活を送ることにならざるをえないような、なにか宿命的なものがあるようだった。事実、そういうはめになったのだが。」⁽¹³⁾

これだけの引用では不十分だが、これに類する叙述は何度もくりかえしあらわれてくる。やむにやまれぬ冒険心と、それがもたらす放浪生活——これは何時の世にも、たえず何物かに束縛され、圧迫されながら、脱出することもできないで、単調な社会生活を過している人間にとっては、魅力的なテーマであ

る。「悲惨な運命」が待ちうけているにしても、ある意味ではやはり「悲惨」な生活を毎日過しているわれわれにとつては、冒険は一つの解放であるにはちがいない。われわれは、主人公の繰りひろげるであろう壮大なロマンスに期待しつつ、読み進んでいく。

ところが、実際のロビンソン・クルーソーは、期待通りには活躍してくれない。もちろん、嵐に遭い、難破し、絶海の孤島に唯一人打上げられて、生命の危険にさらされながら生きるクルーソーの姿は、英雄的であり、悲劇的でもある。われわれが、この面からクルーソーをとらえる事に大きな興味と喜びを感じずにはたしかである。しかし、この本を克明に読めば読むほど、主人公の他の一面、むしろ冒険心とは正反対の性格、思想、行動が大きな比重を占め、力点をおかれて語られていることに注目せざるをえなくなる。神の摂理についての反省（と云つても、現代人の宗教観から見れば、実用的現実的な考えにすぎない）が、事あるごとにくりかえしあらわれ、周到きわまる計画にもとづく規則的な生活がいとまれ、およそ、冒険とは縁のない、むしろ勤勉で現実的な市民の日常生活を思わせる行為が、事こまかに表現、というより「記録」される。特に、執拗なまでの神に関する言及と、数字の羅列は、わが国の読者には大きな抵抗となるであろう。

冒険心に対するに、日常性、実用性、卑俗な道德性、その他、漱石をして、「浪漫的と云つたつて固より下等の意味である」と酷評させた、人間生活の物質的形而下的局面が、『ロビンソン・クルーソー』には充滿しており、一読後、われわれの心に残るクルーソーのイメージは、はじめの、ロマンティックな冒険家の姿から、むしろ実直でぬけ目のない平凡な市民の姿に変わってしまう。

デフォーの他の小説の主役である、盗賊、海賊、娼婦たちも、すべて、処世術的教訓をすぐ口に出し、現実生活にしっかりと根を張った、二十世紀のわれわれから見れば、勤勉な「善人たち」にすぎなくなってしまう。

登場人物の外形から見ても、いわゆる「ピカレスク・ノヴェル」（悪漢小説）の系列に属する如くに予想されるデフォーの小説に、それとは相反する人間が、モラルが、生活が描き出されて、読者の心に、先ず違和感をもたらし、視点と姿勢を変えさせ、最後には、全く別の評価基準から見ただけ「人間性」を認識させることになるのは何故であろうか。ここでわれわれは、あらためて、小説の「二面性」、すなわち、「超時間性」と「歴史性」を、想起させられる。

抽象的、観念的に見れば、不変の本質と、超時間的価値を内包する小説も、一文学作品として具象化されるためには、時間的空間的に制約された「歴史的存在」としての形をとらざるを得ず、特にその小説が、現実の社会環境に密着して構成される場合には「歴史的存在」としての面が一層顕著にあらわれてくる。小説研究の初歩的知識であり、なにもデフォーのみにかぎらず、あらゆる作家にあてはまると思われる、このような、小説の二面性に関する認識を、ここにわざわざ強調するのは、小

説の歴史性への顧慮が、デフォーの場合には、特に重要であるからである。

デフォーが小説の執筆を初めたのは、六十歳に達してから⁽¹⁷⁾であり、それに先立つ波瀾に富む経歴と生活体験は、一般の小説家に比して、より多くその小説に影響している。その上、デフォー自身の性格、多方面にわたる能力と知的関心、超人的な活動力も、その作品に強く反映されている。『ロビンソン・クルーソー』は、自分の生涯のアレゴリーだと、後に述べたデフォーの真意については、種々の解釈もなされようが、今記した様な意味に取れば、単なる文飾にすぎぬとは云えないであろう。

一方、'Defoe's England'⁽¹⁸⁾ という表現が英語にあることから察せられる通り、十八世紀前半のイギリス社会情勢は、デフォーの小説にとって、単なる「背景」ではなく、その骨肉となっており、当時の宗教、思想、文芸の特色も、その作品に定着していると思われる。デフォーに接する時、われわれの心に起る違和感と抵抗のみなものは、その小説を、イギリス十八世紀という歴史的境位に置いてみれば、当時の社会、思想の特徴を示すものにはかならず明らかなこととなるであろう。同時に、ともすれば、現代との類似に牽引されるあまり、当時はまだ明瞭に結晶していなかった思想、意識の諸局面に、現代的解釈を加えんとする危険も、歴史的考察を重視することによって避け得るであろう。

要するに、デフォーの小説を文学研究の対象として取り上げんとする立場も、その小説を歴史的次元に置いて研究せんとす

る立場との不即不離の関連に於て、成立すると云わねばならない。いずれの立場を無視しても、デフォー研究は不十分なものとなるであろう。

以上、きわめて概括的に、デフォーの小説研究の意義と方法について考察してきたが、この方法にそって具体的研究を進めることは極めて困難であり、特にわれわれ日本人研究者にとつて、当時の政治、宗教、思想全般にわたる複雑多岐な様相を的確に把握することは、時に絶望的とも思われる程であるが、小説の「二面性」を濃厚に具有するデフォーを対象とする場合は、(デフォーのみならず、リチャードスン其他の十八世紀小説家を対象とする場合も) この困難を回避する事はできぬであろう。しかし、そこに、小説研究の意義と興味の存する事も否定できない。

筆者自身、この障害に直面して、暗中摸索の域を脱し得ぬ実状ではあるが、デフォーはじめ十八世紀小説に対する関心と研究が比較的乏しいと思われるわが国の現状にかえりみて、あえて私見を述べ、識者の批判と教示を乞う次第である。

(13) 'The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe of York Mariner' (Everyman's Library, ed.)

(14) たとえば、神の自分に対する恩恵をはかるのに、簿記の貸借対照表式に、有利な点と不利な点を書き出したすえ、神に感謝すべき点を認め、「結局、貸し方のほうに歩

がある」と表現しているのも、その独得のあらわれ方である。(前掲書五〇頁参照)

(15) たゞせば、孤島での三年目の生活については、次のように記される。

‘……in general it may be observ’d that I was very seldom idle; but having regularly divided my time, according to the several daily employments that were before me, such as, first, my duty to God, and the reading the scriptures, which I constantly set apart some time for thrice every day; secondly, the going abroad with my gun for food, which generally took me up three hours in every morning; when it did not rain; thirdly, the ordering, curing, preserving, and cooking what I had kill’d or catch’d for my supply; these took up great part of the day; (*ibid.* p. 85)

(16) ヴァージニア・ウルフは、前掲「ロビンソン・クルソー」と題する評論に於て、デフォエの作品を、「素焼の水がめ」(a plain earthen ware)にたとえ、「そのがっしりした堅牢感を肯定的に評価し、デフォエの現実感覚を推奨している。

(17) デフォエの生年に関しては、異説があるが、ここでは、信頼度の高い、一六六〇年説に従う。なお、デフォエの標準的伝記としては、次のものが詳細であり、また興味深い。デフォエの一生は、人間研究の対象としても絶好である。

James Sutherland: *Defoe* (London, 2nd ed. 1950).

(18) ウォルター・アランは「その好著『イギリス小説史』(Walter Allen: *The English Novel* (London, 1954) の中で、デフォエを「散文的なレオナルド」(a prosaic Leonardo)と評している。

(19) G. M. Trevelyan: *Illustrated English History* (London, 1949) Vol. III, Ch. 1, 'Defoe's England' 参照。

(20) イブン・ウオットは、前掲書に於て、「V・ウルフ等のデフォエ評価に、「あまり見えすぎる」(‘seeing too much’)傾向を指摘している。(われわれはむしろ「あまり見えなさすぎる」ことを警戒せねばならぬ。)

(附記)

紙数の都合で、具体的引用が足りず、引用した場合も、原文あるいは訳文を割愛し、参照指示も不充分になったことを諒とされた。

(青山学院女子短期大学講師)